

サンタクロースは、ホントに生きている

主任司祭 フランシスコ 山口 一彦

クリスマスシーズンになると、幼稚園の保護者会などで、私は次のような話をお父さんお母さん方に繰り返してきました。

「クリスマスも近づいてきましたので、今日はサンタクロースについて、お話ししますね。皆さんのお子さんたちは、たぶん、まだサンタさんが本当にいると確信しているでしょう。では、皆さんご自身は、何歳までサンタさんのことを信じていましたか。まあ、ふつうは、小学校低学年くらいですかね。

以前、国語教育学の世界で、小学校高学年から高校生までもを対象にした、結構大規模なアンケート調査をしたことがあります。その中で『あなたは何歳までサンタクロースを信じていましたか』という問いかけがありました。その回答を集計した結果、サンタクロースを信じていた年齢と国語の成績との間に、無視できない相関関係があった、ということです。つまり、大きくなるまでサンタさんの実在を信じていた子ほど、ただの作り話だったんだと早々に気がついた子と比べて、国語の成績が良いということです。

目に見えない世界へのあこがれが大切だ、ということですね。現実世界の向こう側に、目には見えないんだけど、とっても大切な何かがあるんだとあこがれ続ける心が、文章を読む力を育てます。そしてそれは、単に国語の学力だけに留まりません。社会科学、人文科学、自然科学……どの分野でも、目に見える世界の向こう側に潜んでいる、目に見えない何かを探究しようとする心が、原動力になります。これから町中がクリスマス一色になりますが、どうかお子さんたちを、その雰囲気の中に、どっぷりと浸らせてください。

それでも、いつかそのうち、皆さんのお子さんたちは、サンタさんなんて本当はいないんだ、と気づく時が来ます。必ず来ます。その時に是非、次のようなことをお話ししていただければと思います。

サンタクロースには、モデルになった実在の人がいます。西暦 300 年頃、今のトルコにあるミラという町の司教さんをしていた聖ニコラウスという方です。優秀な神学者だっただけではなくて、非常に優しい人格者だったそうです。聖ニコラウスには、こんな伝説が残されています。

『ミラの町外れに、とても貧しい一家が住んでいて、近々3人の娘を身売りに出さなくてはならないという噂を、ニコラウスは人づてに聞く。心配になったニコラウスは、その家

の側まで行くが、なかなか中に入れない。司教である自分が突然訪ねたりしたら、何のおもてなしもできない家族に、心苦しい思いをさせてしまうだけだ。どうしようかと思案していると、粗末な小屋の低い屋根の上にある煙突が目に入った。ニコラウスはそっと屋根によじ登って、その煙突から金貨を一枚投げ入れた。すると、煙突の下の暖炉の側に干してあった靴下の中に、その金貨がストーンと収まった。一家は、その金貨のおかげで貧しさから抜け出して、3人の娘たちも売りに出されずに済んだ。』

どうですか。良いお話でしょ。当時の司教様は、赤い制服を着ていました。だから、サンタさんは赤い服なんですね。煙突から入って、良い子の靴下にプレゼントを入れる訳も分かりましたでしょ。

さて、ここからが大切なところです。このニコラウスという方は、亡くなった後、『聖人』となりました。だから『聖ニコラウス、サンタ・ニコラウス』って言うんですね。『聖人』って言うのは、この地上に生きていた時の篤い信仰と善い言動によって神様の国に入った、と教会が正式に宣言した方々のことです。今も神様のもとで、私たちのために執り成していると信じられている方々です。聖人の中で最も親しまれている方は、聖母マリア様ですね。ですから、ニコラウスは聖人として、今も永遠の命を生きています。神様のもとで生きて、私たちのために、特に貧しさや困難の中で苦しんでいる子どもたちのために、一生懸命に働いています。

確かに、トナカイが引くソリに乗って空を飛び回る、目に見えるサンタさんなんていません。そのことにお子さんたちが気づいた時、本当の意味のサンタさんのことを話してやってください。サンタさんは今も本当に、あなたを見守っているんだ、と話してやってください。」

幼稚園の保護者会での話は以上です。そして、このことは、大人の方々にも知っていただきたいことです……「ほんとうに大切なことは、目に見えないんだよ」……サン＝テグジュペリが『星の王子さま』で主人公に語らせた言葉です。この世は物質世界だけで出来ているわけではありません。目に見えない神秘的な次元で、私たちは神様に支えられています。すでにこの世の人生を終えた方々とも繋がっています。

この真理を心に留めて、喜びのうちに聖なる夜のお祈りを捧げましょう。